

歴史認識の衝突

朝鮮引揚げと日韓国交正常化交渉

The talk and the Q&A will be conducted in Japanese without translation.

朴敬珉 (パクキョンミン、Kyung-Min Park)

PhD from Keio University, Japan and currently visiting scholar at the Faculty of Asian and Middle Eastern Studies, Cambridge University

本発表は、在韓財産問題をめぐり植民地朝鮮の在留日本人であった「朝鮮縁故者」が果たした役割と認識を通してみた日韓関係の一断面に関する実証研究であり、1945年8月の日本の敗戦に伴ない朝鮮が日本の植民地支配から解放された時から、1953年10月に日韓国交正常化交渉の第3回会談が、いわゆる「久保田発言」により決裂するまでを考察対象とする。まずは、解放後の朝鮮に引き続き定住し財産の保護を図ろうとした朝鮮縁故者の活動と、その背後にある植民地認識を明らかにするが、そこに1953年の日韓第3回会談が決裂するまでの流れの原点が形成されたという視角に立つ。そして、豊富な第1次史料を読み込むことで、朝鮮縁故者の役割および認識と日韓国交正常化交渉に臨む日本政府の対応が、相互の関連性を持ちながら調和していく過程を実証的に考察する。日韓国交正常化交渉に関する従来の研究には、1951年の予備会談前後から考察を始めるものが多いところを、本研究は1945年8月の朝鮮解放を分析の起点とした。そのことで従来の研究の空白期間を埋めるだけではなく、日韓国交正常化交渉が予備会談以降の第3回会談で一端決定的に決裂する理由と背景の源流を解明し、その空白期間をその後の期間への連続性のなかに有機的に位置付け、意義付けている。そしてなにより、以上の実証的な研究により、朝鮮縁故者と日本政府との関係が、初期の日韓国交正常化交渉の過程とその結末に重要な影響を与えていたことを浮き彫りにしたことは、日韓関係研究のみならず今日の日韓歴史認識問題への示唆、そして日本帝国崩壊後の東アジアにおいて正当性の獲得に向けた闘争に関する比較研究への貴重な貢献である。



イメージは、朝鮮半島を虎にたとえた地図です。

5pm Thursday, January 18, 2018

Room 7

Faculty of Asian and Middle Eastern Studies

Sidgwick Avenue, Cambridge

CB3 9DA

For more info contact Dr Barak Kushner: bk284@cam.ac.uk

Dinner with speaker and invited guests to follow.

